高須賀米はオーストラリアで初めて作られた米で、高須賀穣（伊三郎）と呼ばれる日本人によって作られた。

高須賀穣（伊三郎）は１８６５年２月１３日に松山藩士の子として、愛媛県松山で生まれた。
穣は、日本とアメリカで教育を受けた。１８９６年にはペンシルバニア州にあるウエストミンスター・カレッジで文学士を取得。アメリカに滞在中、名前を伊三郎から穣に改名した。ヨーロッパの各地を旅行した後、１８９７年日本に帰国。
１８９８年衆議院議員に当選。５年間ほど、議員を務める。３期目の立候補を諦めた穣は、妻イチコと二人の子、昇と愛子を同行して、エンパイア号と呼ばれる船で１９０５年３月１５日にメルボルンに来た。
メルボルン到着後すぐに「タカスカ・ダイト・アンド・カンパニー」という貿易会社をクイーンズ・ストリート１３６番地に設立。商売をしながら、「ストット・アンド・ホー・ビジネス・カレッジ」で日本語を教えた。はからずしてオーストラリアで初めて教室場面で日本語を教えた人物となった。
当時のオーストラリアは１９０１年から白豪主義を施行しており、高須賀一家は１年間の滞在許可しかもらえなかった。しかし、日本領事の口添えもあり、ビザを１年間延長してもらうことに成功する。
ビザ延長に伴って、穣は当時海外から輸入しなければならなかった米を生産することを決意した。そこで連邦政府分析官のウイルキンソンの仲介で、ビクトリア州政府の首相トーマス・ベントと土地・調査大臣に会い、米の試作のために、マレー川の近辺にある公用地の借用を許可してもらいたいと説得した。マレー川近辺は洪水に見舞われることが多く、米作りには理想的だが、ほかの作物には適さないと思ったからだ。
１９０６年、公用地借用の許可が下りる前に、スワンヒル近くのナイアにある３５エーカーの土地をワトソンから借り、父親の高須賀嘉平が日本から送ってくれた米の種もみを植えた。
その間、政府はティンティンダー西にある２００エーカーの土地を穣に貸与することを許可した。１エーカーにつき６ペンスで、５年にわたる土地占有権が与えられたが、それには条件があった。米作りに利用することと、土地の改良に年間１エーカー当たりにつき１０シリングの歳出を５年間継続して供給することであった。この条件を満たせば、年間１エーカーに付き３ペンスで永久貸与されると言う契約であった。
１９０６年の作物は収穫前に羊に荒らされて、種子は全滅。
１９０７年にピアンギルに６５エーカーの土地を借り、米の種子を植えた。しかし干害のため、３袋の米しか収穫できなかった。その米も黒くなっていたり、緑色で食べられなかった。
１９０８年、政府から借りた土地のあるティンティンダー西に移った。堤防を作るため７００ポンドの資金が必要であったが、穣にはそれだけの資金がなかった。そのため粗末な縦４．５メートル、横５．５メートルの小屋に住んだ。穣はガンボワー川の堤防作りに忙しく、稲を植えるのを忘れた。この年、穣の父親高須賀嘉平は、日本から１５袋の種もみを持って、穣の堤防作りを手伝うために来豪。
１９０９年、４０エーカーの土地を堤防で囲むことに成功して、そこに米の種子を植えた。しかし洪水が堤防を破壊し、作物は全滅した。作物が全滅したばかりか、穣たちもナイアに避難しなければいけない状況に陥った。
穣は、日本から米の専門家を二人呼び、共同で稲作ができるようにしたいと政府に許可を求めたが、彼の要請は拒否された。

１９１０年、穣は全精力をあげて堤防作りに取り組んだ。ナイアの１エーカーの土地に米の種子を撒き、２キロの長さの堤防を築いたが、その堤防もこの年の洪水によって破壊された。しかし幸運なことには翌年の米作を続けていくのに必要なほどの種子は残っていた。

１９１１年、ナイアで実験のため６メートル平方の土地に２５種類もの米の種子を撒いた。その中で３種類の米が成功した。それは、穣の父親の嘉平の名前を米の種類として命名したカヘイ、それにヒデリシラズ、神力の３種類であった。

穣は土地省に手紙を書き、堤防を作る必要があることを訴えた。そして半分は彼の借地であるが、あとは公の土地であることを指摘し、費用を半々にすることを提案した。しかし土地省は、高須賀家の周囲の土地に、ヨーロッパからの移民に与える計画を立てていたので、高須賀の借地は障害になっていた。そのため穣の嘆願書は無視された。

１９１２年　土地省は土地埋立地計画について穣に通知した。そして、この計画が完成するまでは、穣が借りた第４７貸付地の永久貸与は考慮されないと連絡をしてきた。また、穣が借地契約に記されていた年間１００ポンド歳出するという成果をあげていなかったという理由をもって、政府は堤防設立の援助を拒否した。

エイジ新聞は「日本人によるビクトリアのコメの試作」と題して穣の成功を報告し、灌漑さえ怠らなければ米作りができることを証明したとの記事を載せた。

１９１３年　ティンティンダー西の 5 エーカーにカヘイとエヒメを植えて、１エーカーあたり１トン（12 袋）のコメの収穫を得た。

その年の終わりに穣は５４種類の米の種子を試した。この時、手で苗をうえないで、小麦栽培のように、機械を使った。2－4 フィート（61－122 センチ）の水を使って、1 エーカー１トンを収穫することができた。

１９１４年　穣は水不足のため５０エーカー中の１０エーカーしか灌漑できなかった。それにもかかわらず、その１０エーカーから６０袋の米を生産。初めて商業的生産に成功した。この年の収入 230 ポンド。最初の１００ポンド（約４５キロ）の種子を売って得た収益を市長のベルギー救援基金に寄付した。

１９１４年の稲の実りの中で （穣と妻のイチコ）, 写真提供：髙市聡氏
出典：HTTP://JT1865.WPBLOG.JP/%E3%82

穣の息子、昇はニューサウスウエールズ州の農業省に高須賀米を持って行った。その時穣は下記のような説明をつけた。
「コメは小麦用の機械を用いて、広い土地で栽培することができます。唯一の相違点はコメには灌漑が必要だということです。種子はドリルを使って撒くことも可能ですし、散布することもできます。栽培面積が広い場合、収穫は刈り取り機またはバインダーで収穫できます。脱穀する前に数日乾燥させる必要があります。」
農務省はマーランビッジー灌漑地区にあるヤンコで初めて高須賀米の種子をまいて試作を始めた。
前述の通り、ビクトリア土地省は穣の借地の周辺をヨーロッパからの移民の入植地にすることを考えていた。そのことを知らず、穣はビクトリア政府にティンティンダーの給水設備、塀と堤防作りのため対する大規模な稲作の資金援助嘆願の手紙を書いた。その返事として来たのは、穣の家は１０ポンドの値打ちしかなく、４キロ足らずの堤防は完全に破壊されているとの査定だった。土地省は、穣にティンティンダーの土地を諦め、スワンヒルで米作をすべきだと勧めた。しかし、土地省からの説得にもかかわらず、穣はティンティンダーに戻り、１５０ポンドかけて家を改築し、堤防工事に８０ポンドのお金をつぎ込んだ。それは契約書に書かれていた５００ポンドには満たなかったが、１９１５年、穣は永久借地権を認められた。
１９１６年から１９１７年にかけて、　川の水が乾かなかったので、穣は堤防を作れなかった。その間、ニューサウスウエールズのヤンコでは高須賀米の試作が続けられていた。しかし、花が咲く時期の熱風のため、不作だった。
１９１８年、川の水が乾き、穣は堤防作りを再開した。ヤンコの高須賀米の試作はこの年もイナゴに襲われ不作だった。
１９１９年、５エーカーの土地に耕作したが失敗した。それは穣の使った種子は 4 年間貯蔵されていた物で古すぎたためだった。堤防を作るため銀行からお金を借りようとしたが、永久借地権の土地が担保ではお金を貸せないと断られ、資金作りに失敗した。そこで、穣はビクトリア土地省に自由保有権につながる選択購入借地権の申請をした。
１９２０年から２１年にかけて、穣の農場は洪水に見舞われた。穣は子どもたちをボートで送り迎えしなければならなかった。ヤンコで行われていた高須賀米の試作も、この年霜のため失敗した。
１９２１年４月、穣は税務署に「１９２０年度の所得なし」と報告した。また、堤防を作るため千ポンドの銀行ローンを申請した。堤防は３マイル、完成は６ヶ月かかりだと穣は見込んだ。しかし財源確保はできなかった。その間、米作りに関心を寄せる人から時折問い合わせがきたが、その人達に供給できる米の種子もなかった。
穣は地元代議士を通して、土地大臣に選択購入借地権に対する再考を求めた。穣は土地大臣に個人的に会って事情を説明した。
その結果、土地省の決断は内閣によってひっくり返され、選択購入借地権が穣に対して発行された。
１９２２年、穣は土地の自由保有権を確保した後、２００ポンドでティンティンダーの土地を買った。この年は米は豊作だったが、穣は全財産を土地購入にあてたため、家の財政は危機に陥っていた。
ヤンコでは、カリフォルニアから取り寄せた種子、カロロ、わたりぶね、コルサで米の生産に成功する。
１９２３年８月、穣は、ビクトリア農業省に、昇を稲作専門家として奉仕させる代わりに米の試作を援助してもらいたいと申し出たが、断られた。

１９２４年１月、穣は自治・領土大臣、上院議員ピアスに、昇を政府に奉仕させたいと申し出た。その時、日本から５０変種以上もの米の種子を輸入したが、洪水防御策の欠如のため、マレー川流域での稲作の将来の可能性がみえないと訴えた。同時に米はオーストラリアで最も有益な作物で、２から４エーカーフィートの水で、高須賀米は１～２トンの収穫があげられると述べた。

エイジ新聞は、ピアスにあてた穣の嘆願書の報告書を記載した。

ピアスは、高須賀の手紙を貿易委員会に送り、オーストラリアで新たな産業が芽生える見込みがありそうだと、実質的に稲作の促進を支持した。その結果、ナヤ新入植者連盟、フランス領事とクイーンズランド政府が米作りに興味を示した。また、製粉業者のロバート・ハーバー・アンド・カンパニーは米の製粉を支援すると申し出た。

１９２６年マリー川と同地域にあるマーランビッジー地域周辺で高須賀米を使って企業ベースの大々的な米の生産が開始された。しかし失敗に終わった。

１９２７年　ヤンコではカロロが主要な米となった。穣は、経済上の理由で米作を断念した。そしてナイアでぶどう作りを始めた。

１９２８年、政府は高須賀米は利益をもたらさないと結論付け、高須賀米の栽培を完全に廃止した。

穣は１９３９年一人故郷の松山に帰り、１９４０年２月１５日に死去した。穣の息子の昇はトマト栽培で成功をおさめ、１９６４年から１９７０年にかけてハントリー郡の郡長になった、

高須賀一家は長期にわたり、苦難の道をたどった。高須賀穣は、干ばつ、洪水、イナゴのみならず、銀行や政府の変わりやすい政策と戦い続けた。結果的には高須賀米の成功は長くは続かなかった。しかしながら、高須賀穣は疑いもなく豪州の米作のパイオニアであり、彼の遺志は今もいたるところで垣間見ることができる。ナイアの森の穣の建設した堤防に続く道はタカスカ道路と命名され、堤防の近くには記念碑が建てられている。高須賀家の所持品はスワンヒルのパイオニア・セトルメント博物館に展示されている。高須賀穣が初めてオーストラリアで育てた米のサンプルは、ビクトリア博物館に保管されている。

参考文献

D.C.S. Sissons (1980) “A Selector and his family” Hemisphere an Asian Australia Magazine Vo. 25 No. 3 pp.168-174

David Sissons (1998) “Selector and his family” オーストラリアの日本人ー　一世紀をこえる日本人の足跡　全豪日本クラブ　pp.38-40

ギャリー・ルウイス　「高須賀穣―オーストラリア米のパイオニア」

ギャリー・ルウィス　「高須賀イサブロー（ジョー）日本米のパイオニア」

Grace Willough (1993) Nyah District History “On “this bend” of the river

Neville Meaney (2007) towards a new vision: Australia and Japan across time University of New South Wales Press Ltd.

Internet search

Australian Dictionary of Biography Takasuka, Jo (1985-1940)
http://adb.anu.edu.au/biography/takasuka-jo-8741

Bendigonian (Bendigo, Vic: 1914-1918) Thursday 29 April 1915, page 31 “Successful Rice Culture in Northern Victoria “ by L.M. Johns http://trove.nla.gov.au/newspaper/title/315

Celebrating a century of Australian rice and pioneer Jo Takasuka- ABC Rural
www.abc.net.au/news/.../celebrating-a-century-of-australian-rice/566190

Kerang New Times (Vic: 1901-1918), Tuesday 15 June, page 4 “Successful Rice Growing”
nla.gov.au/nla.**news**-title297

The Ballarat Star (Vic: 1865-1924), Thursday 1 April 1915, page 6, Swan Hill
nla.gov.au/nla.news-title185

The Canberra Times (ACT: 1926-1995), Sunday 17 December 1995, page 4 “Rice exporters owe debt to Japanese visionary.” nla.gov.au/nla.**news**-title11

「高須賀穣ものがたり」日豪を結ぶコメの懸け橋 http://www.sunricejapan.jp/takasuka.html

メルボルン＆タスマニアを基点とした日本語エコツアー、エコツーリズム講座 特集記事＆リポートーオーストラリアで最初の稲作事業に成功した日本人、高須賀穣
gogotours.com.au/article_004.html

高須賀穣：HTTP://JT1865.WPBLOG.JP/%E3%82

考え Roo A Thinking Aussie’s Japan 日本人移民、オーストラリアの米産業成功の父となる
http://kangaeroo.com/?s=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E7%A7%BB%E6%B0%91

久保田満里子記

久保田満里子はメルボルン大学日本語科の元講師で、小説「豪州米作の祖の妻、高須賀イチコの物語」の著者である。